

第 11 回 CESS 参加記

総文責：菊田悠

各項文責：今堀恵美、野田仁、菊田悠、秋山徹、藤本透子

第 11 回中央ユーラシア研究年次大会は、2010 年 10 月 28 日から 31 日にかけて、アメリカのミシガン州イーストランシングに位置するミシガン州立大学において行われた。発表の全てを網羅するものではないが、以下にその概要を報告する。本報告は、各項執筆者が書いたものを、菊田がまとめたものである。

I

第 1 日目 第 1 セッション： < Socio-cultural Continuity and Change of Islamic Practices: Anthropological Approaches >

本セッションでは、ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズにおいて人類学的フィールドワークを行った日本人人類学者によるイスラーム実践に関する報告が行われた。会場に 50-60 人用の広い部屋が用意され、欧米や中央アジアをはじめ各国から 30 名を超える聴衆が集まる関心の高いセッションとなった。

藤本透子（国立民族学博物館）による最初の報告 “The Revitalization of Commemorative Rituals: Reconsidering Islamic practices in Post-Soviet Kazakhstan” では、カザフ人のイスラーム実践をめぐる「アルワク（死者の靈魂）複合」概念が提示され、近年のイスラーム復興を担う若者たちでさえ、この「アルワク」を重視する死者供養を完全に無視できないとの指摘がなされた。この指摘に対してディスカッサントの John Schoeberlein 氏（ハーバード大学）から、死者供養における系譜と社会関係の結びつきなど、近年人類学で話題となっている系譜意識の記憶に関連した興味深い質問がなされた。

2 番目の報告者菊田悠（北海道大学スラブ研究センター）は “Veneration of Patron Saint by Muslim Artisans in Modern Uzbekistan” と題し、陶業の街として有名なりシタン市で職業別の守護聖者であるピール崇敬の変容と持続について取り上げた。菊田報告に対しては、ディスカッサントとフロアから企業家モラルとピールの関係、ピールとスーフィーの関係に関する質問が寄せられ、人類学的イスラーム研究の伝統的テーマである「聖者」をめぐる聴衆の関

心の高さを伺わせた。

3 番目の報告者今堀恵美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）からは“The Expansion of Halal Food in Uzbekistan: Islamic Revivalism in the Post-Post Socialist Epoch”という題のもとに、タシュケント市で近年漸増するハラール食品を題材に「もの」から見るイスラーム復興の報告があった。この報告に対して、「もの」を通じて人間とイスラームのリンクを照射する「生産のエスノグラフィ」としての新たな試みがディスカッサントから評価された。

最後の吉田世津子（四国学院大学）による報告“Order, Disorder and Mosques in Rural Kyrgyzstan: Rethinking the revitalization of Islam”では、調査地で中央モスクに集まる人々、なかでもイスラーム宣教活動（davat）家に着目し、活動家に対して隣人たちが抱く両義的な感情が取り上げられた。吉田の報告についてはフロアから世界規模で生じるイスラーム宣教活動とのリンク、宣教活動員の年齢や費用工面など多数の質問が集中した。なかには宣教活動の活発化による宗教的リーダー像の変化を尋ねる刺激的な質問もあり、有意義な議論が展開された。

総じて、ポスト・ソヴィエトという文脈でイスラームを論じ、イスラームの「正統」なイデオロギーのみに着目するのではなく、人類学的手法によって日常生活におけるイスラーム実践に焦点を当てた点が高く評価された。[文責：今堀恵美]

II

第1日目第2セッション：< Kazakh Nomads and the Russian Empire in the 19th Century >

当セッションは、カザフ草原にかかわる歴史研究の米国における第一人者と言うべき Virginia Martin 氏（ウィスコンシン大学）の呼び掛けに応じて、カザフ国内の研究者も交えて組織されたセッションである。

ごく簡単に内容をまとめると、Martin の“Nomadic Tools of Governance in the Middle Horde Kazakh Steppe”は、1830年前後のカザフ遊牧社会の中に“Patronage-client”関係を見出し、Gulbanu Izbassarova（国立アクトベ大学）の“Transformation of Kazakh Society in the 19th Century (Based on Materials of the State Archive of Orenburg Region)”は、19世紀後半のロシア統治の深化にともなうカザフ遊牧地の変化を論じた。野田仁（早稲田大学イスラーム地域研究機構）の“Kazak Nomadism in the Ili Region under the Russian Administration, 1871-1881”は、露清間を移動していたあるカザフ＝ハン一族に焦点を当て、彼らの権威が両帝国から保障されていた構造を分析した。Zhanar Jampaissova（グミリョーフ名称ユーラシア大学）の“How Russian Officials Defended Kazakh Tribal Interests During Migrations: A Case Study from the Steppe and Turkestan Regions in the 1890s”は、当時の遊牧の実態を地図上に落としとして提示し、移動

の状況と土地所有の問題を明らかにしようとする新しい研究であった。

それぞれの報告に対して、Christopher Atwood（インディアナ大学）がモンゴル史の立場から批評と疑問点を提示した。残念ながら時間に余裕がなく、フロアからの質問は今一つ報告内容とは噛み合わなかったが、Atwood のコメントは非常に貴重であり、たとえば筆者は新疆のトルグート遊牧民社会との比較について示唆を受けた。また、このようなカザフ国内外の研究者の共同作業が今後も期待されるという意味で意義のあるセッションになったと感じられた。[文責：野田仁]

III

第1日目第3セッション：＜ Higher Education in Contemporary Kyrgyzstan: Participation and Purposes ＞

午後の第一部でクルグズにおける教育（主に大学）をテーマにしたパネルに参加した。Martha Merrill（ケント州立大学）の発表“National Needs or Political Purposes: Hijacking Higher Education in an Era of Global Rankings”では、大学の一極集中が進むにつれて地方の教育レベルが低下する懸念が表明された。続いてミシガン州立大学の Todd Drummond は“Bias, Equivalence and Validity in High Stakes Testing: The Case of Kyrgyzstan”と題して大学入試などにおけるロシア語とクルグズ語の並列表記はどこまで可能かを多くのアンケート調査から考察した。最後の Alan DeYoung（ケンタッキー大学）は“Whatever Happened to the Class of 2010: Seventeen Kyrgyz Lives ‘In Transition’”と題し、現地での英語教育中に出会った若者たちの夢と現実を紹介した。

同時間帯には『Islamic Central Asia: An Anthology of Historical Sources』Indiana Univ Pr (2009) Scott C. Levi（編集）、Ron Sela（編集）を用いた授業の進め方を紹介し、議論するラウンドテーブルも行われていた。

第1日目第4セッション：＜ Roundtable: The Political Economy of Central Asia’s New Entrepreneurial Class ＞

次のセッションではロンドン大学の Gul Berna Ozcan 女史の近著『The Political Economy of Central Asia’s New Entrepreneurial Class』Palgrave Macmillan (2010) を巡るラウンドテーブルに参加した。短期間に中央アジア各国を精力的に回り、多量のデータを集めてまとめあげた著者の力量に多くの賛辞が寄せられた。このように著作を紹介し、その背景や今後の展望なども議論する形のラウンドテーブルは大変良い宣伝となるわけで、日本の研究者も英語圏で出版した際には見習うべきと思われる。

なお、同時間帯には早稲田大学の扇原淳准教授と齋藤篤から、カザフスタンにおける健康

教育に関しての発表も行われており、こちらも盛況であったと聞く。

第1日目：< Plenary Address >

ディナーの後にはハーバード大学の Baktybek Beshimov による講演が行われた。演題は“Kyrgyzstan’s Politics of Ethnic Hatred: How the Roots Were Planted and the Fruit Was Harvested”であり、今年6月のオシュにおける民族衝突の背景と、それを乗り越えるための展望が語られた。オシュの近郊で育ち、父親はウズベク語やタジク語にも堪能であったという氏の話は、当事者の一人としての地域への愛情と苦悩がこもった語りであった。興味深かったのは「住民にとっては平和と発展が第一。そのために民族紛争を回避する方法を探ると、市民社会と多民族による国家形成プロセスへの参加に行き着く」という下からの目線で民族融和を目指している点であった。オシュのウズベク人について、一枚岩ではなく、いくつかの異なる主張のグループがあると指摘している点も具体的で重要であると思われた。

第2日目第5セッション：< Assessing Coercion: Domestic Politics in Central Asia >

午前最初のパネルでは特に2番目の Farrukh Imazarov (University of Applied Sciences) 発表が“Managing Regionalism in Turkmenistan”と題してトルクメニスタンの新聞やインターネット上のデータを分析し、情報の少ないこの国に関する興味深い報告を行っていた。それによると、ベルディムハメドフ大統領は前任者よりも地方に関してはより平等的に振る舞い、大統領に極端に権力が集中したスルタン主義というよりも、大統領とそれを支える兄弟や親族、そして主な3つの部族のバランスによる統治へゆるやかにシフトしているということである。[文責：菊田悠]

IV

第2日目第5セッション：< Pre-1917 Kyrgyz and Steppe History >

本パネルは帝政ロシア統治下の中央アジア遊牧社会をめぐる若手研究者のセッションで、ユニークな史料と着眼による報告が集まった。ミシガン大学の Ian W. Campbell は、“Colonial Interlude: The Shcherbina Expedition of 1896-1903”という題で、19世紀末から20世紀初頭にかけてカザフ草原の土地経営統計調査に従事したシチェルビナ調査を、ロシア帝国史の脈絡において捉え直す新鮮な報告を行った。また、ワシントン大学に所属するクルグズ人研究者 Jipar Duishembieva の報告“The Revolt of the 1916 in the Poems of the Kyrgyz Oral Poets”は、従来主に公文書史料に依拠して研究されてきた1916年叛乱を、アクンの詩をはじめとする新たな史料群を用いて再考する新しい試みであり今後の研究の深化が期待される。秋山徹（日本学術振興会特別研究員）は、“Modern Kyrgyz History Re-examined: Aspects of Russian

Imperial Rule and Kyrgyz Tribal Leaders” と題してロシア帝国のクルグズ遊牧社会統治を、その部族指導者層の包摂と排除をめぐる諸相を通時的に明らかにすることで再考した。[文責：秋山徹]

V

第2日目第7セッション：＜ Kazakhstan after Nazarbaev ＞

これはラウンドテーブルで、司会にジョージ・ワシントン大学の Sean Roberts、デイスカッサントにトロント大学の Edward Schatz や KIMEP (Kazakhstan Institute of Management, Economics and Strategic Research) のアメリカ人研究者 Boris Stremlim を迎えて開催された。ナザルバエフ大統領が退いた後の政治を考えることは、カザフスタンのみならず中央アジア全体にとって重要だという問題意識に基づき、後継者の不透明性、政党政治の行方、ロシアの影響、民主化の可能性などの諸問題が論じられた。発表を予定していた KIMEP 所属のカザフスタンの研究者 2 人は、直前になって財政上の理由から不参加になったという。会場では中央アジア出身者を含め活発な議論が交わされたが、「民主化」概念や、欧米型の「民主化」を政治の目標として想定することがもつ妥当性など、限られた時間では議論しつくされなかった問題も多かったように思われる。

第2日目第8セッション：＜ Presidential Panel: Conflict in Kyrgyzstan: The Revolution and the Osh events ＞

ホールで行われた特別パネルには、通常のセッションをはるかに上回る約 60 名の参加者があった。ジョンズ・ホプキンス大学の Alisher Khamidov はオシュ近郊出身のウズベク人で、“Violence in Kyrgyzstan: Lessons for International Donors and Peace Builders” と題する発表を行った。地元出身者として下からの視線による分析の必要性を強調し、地区レベルでのコミュニティ・リーダーや若者の活動を豊富な写真をおりまぜながら紹介して、地域と親族関係に根ざした社会的紐帯の重要性、国際組織の関わり方の問題点を指摘した。次の発表者 Morgan Liu (オハイオ州立大学) は、9 ヶ月間の現地調査に基づき、ウズベク人の街であったオシュがソビエト都市となりクルグズ人が労働力として流入した経緯などを述べ、両者がオシュを異なる角度から捉えていることを指摘した。

会場からは、前日に基調講演を行った B. ベシモフ、ウズベキスタンで幼少期を過ごした経験をもつクルグズ人 E. キョチュムクロヴァらから発言が相次ぎ、歴史的な多民族共存の状況やクルグズ人内部の多様性などが論じられた。また、学校でクルグズ人とウズベク人が互いの民族史を学んでいないことが問題として指摘され、意見の多様性を伝える教育の必要性が訴えられた。

晩には、< Initiative on Scholars and the Media in Central Asia >と題するミーティングが、J. Schoeberlein と J. Féaux de la Croix のイニシアティブで開かれた。2010年6月のクルグズでの民族衝突に関する報道を契機として、研究者が質の高い分析を社会に提供していくことの必要性が議論され、ワーキング・グループが設置された。なお、CESS終了後、ワーキング・グループによってFacebookサイトに“Central Eurasia Scholars and Media Initiative”というページが開設されており、詳細を見ることができる (<http://www.facebook.com/pages/Central-Eurasia-Scholars-and-Media-Initiative/175815792434009>)。連絡先はE-mail : Scholars.Media.Eurasia@gmail.com である。

第3日目第9セッション : < Division and Accommodation in Early 20th-Century Xinjiang >

当パネルでは20世紀初頭の新疆ならびにウイグル人について、異なる角度からアプローチした3つの発表が行われた。

初めに菅原純（東京外国語大学）が、“Debt-Related Contracts in Early Twentieth Century Xinjiang”と題する報告で、テュルク系ムスリムの債務契約文書の分析からイスラーム法、慣習法、中国法の要素が結びついた法的多元性の状況を明らかにした。続く David Brophy（ハーバード大学）は“The Rise and Fall of the Uyghur Revolutionary Union”と題してソ連の文書資料に基づき、ロシア帝国領（のちソ連領）トルキスタンのタランチとカシュガル商人に着目してウイグル革命連合の形成過程を検討し、現代ウイグルのナショナル・アイデンティティ形成の一端を明らかにした。最後の Nabijan Tursun（独立研究者）は、“Emergence of Uyghur Intellectuals in the Early Twentieth Century and Their Role in the Political Lives of Uighurs”報告において、新疆や中東やソ連などで教育を受けた知識人の活動が、ウイグル民族運動に果たした役割に焦点をあてた。特に、ソビエト、イスラーム、西欧的民主化という3つのイデオロギーのせめぎあいの中で、ソ連留学組が次第に民族運動の中心的役割を果たすに至った過程が明らかにされた。

ディスカッサントの Rian Thum（ロヨラ大学）は、新事実が示されたことを大きく評価するとともに、民衆の制度や秩序の実態に着目した研究と、知識人や民族主義者の活動に注目した研究をいかに統合するかを、今後のさらなる課題として指摘した。会場からはウイグル女性やタランチ女性の民族運動への関与、フェルガナ盆地におけるカシュガル人の活動などについてもさかんに質問が飛んだ。20世紀初頭の新疆史を語るにはソ連支配下の地域についても語らなければならないという菅原氏の言葉に示されていたように、地域的にもテーマ的にも非常に幅の広い議論が展開されたセッションであった。

第3日目第10セッション：＜ Human Capital and Development ＞

研究大会の最後にはセッションが一つのみ行われた。Kamer Kasim（アバント・イゼト・バイサル大学）は、“Regional Implications of the Reintegration and Reconciliation Process in Afghanistan”というタイトルで政治から地域統合の問題を論じた。タリバーン政権崩壊後のアフガニスタンにおける平和調停には、「ソフト・リージョナリズム」という概念のもと、隣接するインド、パキスタンのみならず、イラン、ロシア、さらに中国やトルコが「ソフト・パワー」として役割を果たすことが不可欠だと論じた。

続いて Alexander Libman（フランクフルト金融大学）が、“Is It Really Different? Patterns of Regional Integration in Central Asia”と題して、1999－2008年の中央アジアの経済的地域統合パターンを、貿易と労働力移動に着目して分析した。中央アジアは独立した経済地域というよりも CISの一部としてとらえられ、そのなかでカザフスタンが新たな地域統合に重要な役割をにないつつあるという。また、中央アジア諸国にとって CISほどではないものの中国の重要性が増しつつあり、統計に表れないインフォーマルな中国との貿易が、特にクルグズではかなりの割合を占めることなどが指摘された。

以上の2つの発表を受けて、ソ連崩壊後の変化や地域統合のあり方などについてさかんな議論が交わされた。最終セッション終了後も、会場となったケロッグ・センターでは時間を惜しんで談笑する人々の姿がみられた。

今回の CESS 年次大会は、発表者のみで 152 人を数えた。北米やヨーロッパ出身者が比較的多かったが、ロシア、中央アジア、トルコなど多地域から参加があり、中央アジアから北米に留学している若い研究者たちの姿も印象的であった。日本人による発表も多く、「日本の中央アジア研究」について尋ねられることもしばしばだった。研究成果の海外への発信や、中央ユーラシアを対象とする研究者との学術交流などの点で、収穫の多い CESS 参加であった。2011年のCESS年次大会は、オハイオ州立大学で開催される予定である。[文責：藤本透子。なお、第9セッション部分の執筆に際し、菅原純氏よりご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。]

（きくた はるか：日本学術振興会特別研究員 PD）

（いまほり えみ：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー）

（のだ じん：早稲田大学イスラーム地域研究機構研究院講師）

（あきやま てつ：日本学術振興会特別研究員 PD）

（ふじもと とうこ：国立民族学博物館機関研究員）